

脳ぽちを通して脳血管性認知症患者の認知機能の悪化を早期に発見した経験

正分ゆい¹⁾, 吉田圭¹⁾, 山田寛之²⁾, 藤野文崇³⁾

1) エントレリハ

2) 地方独立行政法人 りんくう総合医療センター

症例紹介

80代女性。2014年5月脳血管性認知症と診断される。7月からエントレリハ利用開始。FIMの認知項目は25/35、HDS-Rは11/30、脳ぽちの計算課題の正答率は50%程度であった。

経過

2014年7月からエントレリハ利用時に日常的に脳ぽちを利用していた。突然、2015年1月に脳ぽちの計算課題の正答率は0%となったため、HDS-Rをとると6/30となっていた。そこで、病院にて新視察した結果、脳血管性認知症の進行が発見された。

考察

脳ぽちは脳機能のトレーニングを目的として利用されている。今回、急激な脳ぽち課題の正答率の低下から脳血管性認知症の進行を早期に発見することができた。毎回の施設利用時にHDS-Rをとることは難しいが、トレーニングとして脳ぽちを利用することは容易である。そこで、脳ぽち課題の正答率を継続的に捉えることにより、認知症の進行や急性増悪を早期に発見できるものと考えられる。